本有誤脱、據一本改

〔榮花物語十三　木綿四手〕かゝる程に東宮○敦明　何の御心にかおはしますらん、かくて限りなき御身を何ともおぼされず、昔の御ゑのびありきのみこひしくおぼされて、時々につけて、花紅葉も御心にまかせて、御覽せむとのみ、なほいかでさ樣にても、ありにしがなとおぼさるゝ御心、よるひるきうにわりなくて、皇后宮○敦明御母娍子に一生はいくばくに侍らぬに、猶かくて侍こそいぶせく侍れ、さるべきにや侍らん、いにしへの有さまに、心やすくこそ侍らまほしけれなど、をり〳〵に聞えさせ給へれば、宮はいと心うき御心なり、御物のけの思はせ奉るならん、故院○三條のあべきさまにしずゑ奉らせ給し御事を、いかにおぼして、やがて御跡を繼がず、世のためしにもならむとはおぼしめすぞ、心うき事なりと常にいさめ申させ給て、御物のけのかうはおもはせ奉るなりとて、所々に御祈りをせさせ給、おぼしあまりては、若やかなる殿上人の申わくがらすならんとて、召おほせなどせさせ給、されど殿○藤原道長のお前にさるべき人して、かうやうになどまねび申させ給、殿のお前いとあるまじき御事なり、さは故院の御繼はなくてやませ給べきか、いみじかりし御物のけなれば、夫がさ思はせ奉るならんとのたまはせて、聞入れさせ給はぬを、いかで對面せんとたび〳〵聞えさせ給へば、殿參らせたまへり、おぼつかなきよの御物語など聞えさせ給て、猶此すくせのわろきにや侍らん、かくうるはしき有さまこそいとむづかしけれ、いかでおり侍りて、一院といはれて侍らんと聞えさせ給へば、さらに淺ましき御心おきてにおはします、○中略たゞこれはこと〳〵ならじ、御物のけのおぼさするなめりと申させ給へば、なでうものゝけにかあらん、たゞ本よりあそびの心のみありならひにければ、かくあるがいとむづかしくおぼえて、心にまかせてあらんと思ひ侍なり、それになほえあるまじうおぼされば、本のほいもあり、さるべき樣にてあらんとなむ思ふと申させ給、いと不便なる事なり、出家と〕までおぼしめさ